



第134号

令和5年3月14日発行

可児市教育委員会

可児市教育研究所

可児市広見1丁目5番地

TEL(0574)63-4841

e-mail: kyoikukenkyu@city.kani.lg.jp



紐帯(ちゅうたい)

可児市小中学校長会長(帷子小学校校長) 井戸 勇治

今回はウニでした。テレビドラマの話です。主人公が人間として生まれたところから生き直すか、ウニとして一生を過ごすかを選択する場面です。主人公はさすがにウニにはなりたくないの、人として生き直しをして徳を積んでいきます。

さて皆さんは、生まれ変わったらどんな職業につきたいですか。教員を対象にした調査によると1位「教員」(17.8%)、2位「医師」(10.7%)、3位「大学教授・研究者」「プロスポーツ選手」(いずれも 8.3%) (ジブラルタ生命調べ「教員の意識に関する調査 2022」より) だそうです。割合は微妙ですが教員が1位です。教員の働き方改革が叫ばれる中ですが、教師に魅力を感じている人が一番多い事実が分かりました。

私が教師になろうと思ったのは、中学校の卒業式がもう終わろうとしていたときでした。学年主任の先生の言葉に感動したのです。毎年こんな感動が味わえる場所は学校しかないし、教員になって同じような感動を子どもたちと味わいたいとそのとき思ったからでした。卒業式が終わり、最終学活で将来の夢を語る場面があったのですが、そこで「教師になる」とみんなの前で宣言したことを今でも覚えています。今でも人に喜んでもらうことが好きです。困っていることがある人や助けを求めている人のお手伝いをする中で、物事が解決したり、良い方向に向かったりすると、その人の喜びでもあるけれど、喜びが自分にも共有されます。何かしらよいことをしたという自己満

足かもしれませんが、教師は自分が関わることで、子どもたちと感動体験や喜びを共有できるすばらしい職業だと思います。卒業した子が立派な社会人となり活躍している姿に出会うと嬉しさを覚えます。

また、子どもたちとの出会いだけではありません。教員には異動が付きものです。私自身、可児市で5つの学校で、遠くは県外の高知県、岐阜市、海津市、関市の学校や地域の方にもお世話になりました。紐帯という言葉があります。文字通り紐(ひも)と帯(おび)ですが、転じて二つのものを固く結びつけるという意味があります。そして弱い紐帯(ちょっとした知人など)の方が価値ある情報の伝達には重要だそうです。確かに、他地区の情報などが知りたいときに深いつながりではなくても、いろんな勤務地で知り合いになった人がいることで貴重な情報を得ることができたことも多々ありました。こうした人的なネットワークをもっている人ほど、例えば転職など人生の転機に面したときに、見通しをもったキャリア形成がしやすいと言われています。

これまで、弱い紐帯ネットワークも含めるとたくさんの方々に支えられてきました。感謝の日々です。

翻って、自分も転機を迎える年となりました。何になろうか、何をしようかと日々が過ぎていきますが、ウニだけはご勘弁願いたいと思っています。

令和4年度 可児市学校所員会 研究実践報告

令和4年度 学校所員会の研究実践について紹介します。

1 学校所員の研究テーマ

「自ら考え、仲間と学び合い、表現する子の育成 ～協働学習の理念に基づいた授業づくりを通して～」

2 研究内容

新学習指導要領における授業改善の視点である「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指し、佐藤学氏の提唱する「学びの共同体」の「協働学習」の理念に基づいた授業づくりを行いました。①コロナ禍における「学び合い」を大切にしたい学習活動の在り方 と ②創造的・挑戦的学びを引き出す「共有の課題」と「ジャンプの課題」の工夫 について実践しました。

3 実践の状況

「協働的な学び」についての研修

① 5月11日 学校所員会

・研究の進め方、研究のテーマ・内容について

② 6月8日 学校所員会

演題「『協働学習』の進め方」

講師 倉知 雪春 先生

(愛知文教大学 学びの共同体スーパーバイザー)

③ 8月17日 学校所員会

・各学校での協働学習の進め方の交流

④ グループ別研究授業・授業研究会

○Aグループ 11月24日

旭小学校 授業者 安田 朋弘教諭
社会「これからの工業生産と私たち」

○Bグループ 11月25日

広見小学校 授業者 古山 宏将教諭
理科「ものの温度と体積」

○Cグループ 10月25日

中部中学校 授業者 春見 高德教諭
国語「筋道を立てて」

⑤ 1月19日 学校所員会

・今年度の実践交流とまとめ

4 実践を終えて

今年度も3つのグループに分かれて授業研究会を実施することができました。また、各校でも所員の先生方が「協働的な学び」について授業実践を行いました。

【成果】～所員の実践報告より抜粋～

協働学習の際に、分からない児童が自ら進んで学ぼうとする姿が増え、授業への関わりが少ない児童が減った。特に、分かっている児童に対して、何度も質問をする姿があり、学習意欲の向上が伺えた。

【課題】

学習課題が分かりにくかったり、逆に簡単すぎてしまったりすると、生徒の学習意欲を高め、自分の力で解決しようとする態度を引き出すことが難しいことが分かった。

昨年に引き続き、タブレットを活用し、協働的な学びを深める実践が多くありました。タブレットを活用し、授業において子ども同士による意見交換、発表などお互いを高め合う学びを通じて、思考力・判断力・表現力を身につけることができていると感じました。

協働学習を積極的に取り入れることにより、教師対児童ではなく、児童と児童とのかかわりが増えます。そのためには、「分からなくても大丈夫。分からない時は、仲間に聴いてみよう。」という学級の雰囲気が必要になります。分かっていることを交流するよりも、自分と同じように困っている、悩んでいる交流の方が、自分事として問題や課題をとらえることができることも実感しました。

今後さらに、子ども達が「学び合うことが楽しい」「できる・分かることが嬉しい」と実感することができる実践になるように、日々の授業改善を行っていきます。

令和4年度 「笑顔の学校」公表会 帷子小学校

学校の教育目標

自ら求め 思いやり つくりだす子
「わかった できた つながった」笑顔のもとを生み出す学校



笑顔の“もと”

帷子小学校の未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」は・・・
「3つのよく」
よく観る・よく聴く・よく考える

【研究主題】

自ら求め、仲間とともに学びを確かにする子の育成
～仲間と考えを広げ深め合い、確かな力を付ける算数科学習のあり方～

【研究仮説】

算数科の付けたい力に沿った指導計画を基にして数学的活動を進める中で、見通しをもって自力解決できるような手立てを工夫したり、ねらいに合わせた協同学習や全体交流の中で自分の考えを伝える言語活動を充実させたりすることによって、主体的に学びながら確かな学力をつける子どもを育成し、深い学びのある授業にすることができる。

【研究内容】

- 1 確かな力をつけるための指導・援助の工夫**
数学的な見方・考え方を働かせ、自分の考えをもつための手立て
にっこりアイテムの活用
- 2 仲間と考えを広げ深め合うための学習活動の工夫**
思考を広げたり深めたりする協同学習・全体交流のあり方
にっこりタイムの活動の工夫

1. はじめに

本校の「笑顔の“もと”」は、3つの「よく」です。「よく 観る」「よく 聴く」「よく 考える」の3つを大切に、子どもたちが、「わかった・できた・つながった」という実感をもつことができる教育活動を目指しています。

2. 実践

3つの「よく」を大切にした授業

研究内容1:確かな力をつけるための指導・援助の工夫

各学年ごとに課題解決の道具を表にまとめた「にっこりアイテム」を個人追究の前に活用したことで、子どもたちは「どの方法で、どのように、何を求める」のか見通しをもって取り組むことができるようになりました。

また、ヒントカードも考えを助ける手立てとして有効でした。

研究内容2:仲間と考えを広げ深め合うための学習活動の工夫

協同的な活動の場面を「にっこりタイム」と呼び、話し合わせたい場面に合わせて、形態や話し合うポイントの提示を工夫したことで、子どもたちが主体的に交流し、学びを深めようとする姿が見られるようになりました。

ICTも交流のツールとして有効でした。

3つの「よく」を大切にした活動

①わんぱくキッズ

全校縦割り遊びの活動です。1グループは、15人ほどで構成します。6年生のリーダーが、下級生の様子をよく観て、全員が楽しむことができる遊びを計画し、運営します。上級生が、下級生を思いやり、優しく接する様子が見られます。

②分団がんばり週間

自分たちで分団登校の様子を振り返り、よい面は継続し、課題点は改善して安全で安心できる分団登校につなげるように、「分団がんばり週間」があります。この期間中は、分団登校後、チェック表をもとに振り返りを行います。

③家庭学習強化週間

広陵中学校のテスト期間に合わせ、年3回行っています。家庭学習カードに取り組んだ内容と時間、評価を記入します。保護者にも毎日見届けをしていただくことで、学習内容をよりよく理解し、習熟の時間を充実させることにつながっています。

3. まとめ

「3つのよく」は、一人一人の生きる力として未来の「笑顔の“もと”」につながっていくことを願って、私たちは実践を続けていきます。

令和4年度 「笑顔の学校」公表会 旭小学校

学校の教育目標

豊かな心で やりぬく 旭の子
考える子 助け合う子 きたえる子



笑顔の“もと”

旭小学校の未来の笑顔につながる「笑顔の“もと”」は・・・

あったか言葉♡あったか行動

【研究主題】

自己を見つめ、他者とともにによりよく生きようとする子
～人間関係づくりを基盤とした授業の創造～

【研究仮説】

温かい人間関係のもとで、自分との関わりで道徳的諸価値をとらえ、自己の生き方についての考えを深めることで、仲間と主によりよい生き方を求める児童が育つであろう。

【研究内容】

- ① 互いの考えを尊重し、自分の考えを伝えることのできる温かい人間関係づくり
 - ・ 仲間の考えに耳を傾けるとともに、自分の考えを伝えることのできる学習集団をつくるためのわくドキタイム
 - ・ 正しい認知、判断を通して、周りの人の気持ちを想像し、よりよい人間関係をつくる土台となるコグトレタイム
- ② 道徳的価値により深く迫るための学習活動の在り方
 - ・ 話し合いの中で他者の考え方を理解することを通して、自分の考え方や変容に気付くことのできる学習活動の工夫
 - ・ 子どもの実態に応じ、道徳的価値により深く迫るための発問の工夫
- ③ 自己を見つめ、よりよい生き方についての考えを深める学習活動の在り方
 - ・ 道徳的価値の適用場面を広げ、自分の生活に結び付けやすくする振り返りの工夫
 - ・ 自己有用感や実践意欲を高めるための学習活動の工夫

1. はじめに

本校は、教育目標である「豊かな心でやりぬく旭の子」の育成を目指し、道徳を中心に研究を進めてきた。また、本校の笑顔のもと「あったか言葉・あったか行動」を様々な教育活動で大切に取り組んでいる。

2. 「笑顔の“もと”」を育むための取組に係わっての現時点での成果と課題

- 多くの教育活動で常に「あったか言葉・あったか行動」に立ち返ることができた。保護者や地域でもこの合言葉が浸透しつつあり、児童の姿の変容からも手ごたえを感じている。
- 毎週のわくドキタイム（SST）で、お互いの考えを安心して話せるあったかい人間関係づくりを大事にしてきたことで、「自分の考えを話したい」「自分とちがう考えを聞いていたい」という素地ができた。道徳をはじめ他教科でも活かされ、仲間の話を聞こうとする姿や自分のことを話そうとする姿が育ってきている。
- 5月よりコミュニティスクールになってから、地域の方々と関わる機会が増え、進んであいさ

をしたり感謝の言葉を伝えたりする姿が増えてきている。

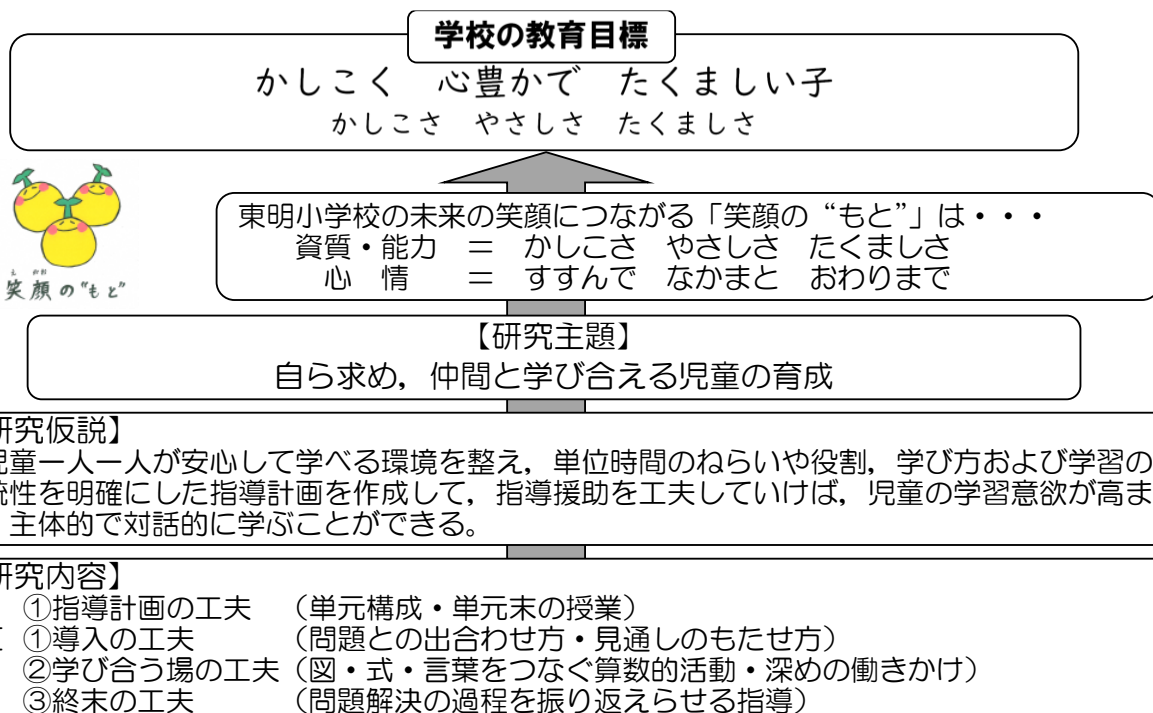
○道徳研究では、タブレットのポジショニング機能を使うことにより、自分の意見を表すことができたり、根拠をもって自分の考えを話したりすることに有効的であった。メリット、デメリットを踏まえて使っていく必要がある。低学年では、役割演技を児童対教師にしたことで、価値をぶれずに進めることができた。

●道徳の授業では、自分の生活と価値をうまく結びつけることができない児童はまだ多い。その架け橋となるような指導を研究する必要があると考える。（展開後段の充実）

3. まとめ

令和4年度は、SSTやタブレットの活用を通して、素朴で温かい心で仲間と関わることのできる素地を育んできた。また、自主性・主体性が弱いという課題も見えてきた。次年度は、温かい人間関係をベースに主体的に活動できる児童の育成に努めていきたい。

令和4年度 「笑顔の学校」公表会 東明小学校



1. はじめに

本校では、自ら進んで、仲間と共に、最後までやり切れた笑顔を増やしたい。そうした経験を積み重ねていくことで、「笑顔の“もと”」となる資質や能力が育つと考えました。そこで、児童と共に、すすんで、なかまと、おわりまで、それぞれの頭文字をとって「す・な・お」を合言葉に、実践を積み重ねてきました。

2. 実践

(1) 主題研究

授業においても「す・な・お」を合言葉に、主体的に行動し、仲間と対話しながら、課題を追究していけるよう、算数科を中心に研究を進めてまいりました。

①研究内容Ⅰ 指導計画の工夫

既習内容も含めて単元の構造を明らかにするとともに、既習内容を確認する場をどのように設けるかについても考えました。また、単元末には、身に付けた知識及び技能を活用する問題・時間を設定するようにしました。

②研究内容Ⅱ 授業の工夫

見通しをもたせる手立てをていねいに講じたり、振り返りシートを作成し、自己の学びを振り返らせたりと、児童が主体的に学びに向かえるようにしました。また、キーワードや話型を示したり、ICTを活用したりして、仲間と学び合える授業を仕組むようにしました。

(2) 特別活動

組織を改編し、内容や進め方を一新した児童会活動。計画的・継続的に取り組んでいる SST や良さ見付け、「つどい活動」などを通して、安心できる人間関係づくりや自己肯定感の向上、主体的に行動する態度等の育成を図りました。

3. まとめ

本年度から新たにスタートさせた活動も、本校の伝統として継続してきた活動もありますが、それぞれの活動を児童と共に「す・な・お」を合言葉に計画、実行し、振り返る(改善する)ことで、本校の課題でもあった児童の主体性を育み、笑顔あふれる東明小学校、「笑顔の“もと”」が育つ東明小学校へと歩みを進めることができました。

第38回教育実践研究助成事業教育実践論文候補者の概要

小・中学校、特別支援学校で培った多様な視点による「個別最適な学び」の実現 ～特別支援教育と通常教育の両方向からアプローチする国語科での学びを軸に～

可児市立今渡南小学校 教諭 武市 諒太郎

昨今、様々な社会情勢の変化に伴い、今まで以上に予測困難な時代へと突入したと言える。児童生徒が様々な人々と協働しながら、多くの社会変化を乗り越え、たくましく生き抜くためには確かな言語能力と思考力に基づく、実力的な力（生きた知識）を育成することが必要不可欠であると考えた。一方、教育現場では支援を要する児童は年々増加している。私は、児童に力を付けるためには、多様な視点における学習指導が重要ではないかと考えた。そこで、児童のつまずき（課題）の根本を明らかにする多面的なアセスメントを行った。そして、誤答分析に基づいた支援方法を模索し、言語能力を高めるための教科横断的な語彙指導の改善・充実や思考力を高めるための認知機能強化トレーニングを試みた。さらに、緻密・網羅型評価に取り組み、児童自身が学習改善をしていくサイクルの確立を目指した。この取組により、障がいのある児童や通常学級に在籍する境界知能の児童も含めた、学習においてつまずき（課題）がある全ての子にとって個別最適な学びの実現を願い、本実践に取り組んだ。

【講評】

テストのもつ役割を確実に理解し、子どもたちのために行った2つの「たつじんテスト」は、非常に興味深いものとなっている。そして、これらのテストをもとにどう支援したらよいのかを丁寧に分析し、手立てを考えている。本論文は、子どもの将来の姿を考えながら、ふるさと可児カルタの作成についてわかりやすくまとめている。このカルタは、子どもたちにとって確かな学力をつけるために有効な教材となっている。特別支援教育の重要性が問われている時代、意義のある論文である。

仲間との関わりの中で、よりよい人間関係を築いていく児童の育成

可児市立春里小学校 教諭 竹屋 安里紗

児童たちの姿やアンケート結果から、仲間に認められていないと感じている児童が多く、仲間とうまく関わる事ができていないという学級の実態があることがわかった。そこで、仲間のよさを認め合うことで自分のよさを実感したり、仲間と関わっていく中でソーシャルスキルを身につけたりすることで、よりよい人間関係を築いていけるのではないかと考え、本研究主題を設定した。

研究内容1「仲間のよさを認め合い、自分のよさを実感するための活動」では、よいこと見つけやよいとこ四面鏡など認め合いの活動を行った。

研究内容2「仲間とうまく関わり合うための活動」では、SST と SGE を組み合わせた活動を行い、ソーシャルスキルの向上を目指した。

研究内容3「仲間と協力することのよさを実感するための活動」では、学級で児童主体のキャンペーン活動を行い、協力することのよさを感じることができるよう実践を行った。

以上の実践から、自分のよさを実感し、ソーシャルスキルを活用できるようになるなど、それぞれの研究内容について成果が得られた。

【講評】

学級の児童の実態と WEB Q-U の結果から主題を設定され、長期にわたり継続的に実践している。どの研究内容においても「児童に実感させること」に重きを置き、実践を組み立てられた点が大変秀逸である。特に、学級の児童に具体的なソーシャルスキルを教え、身に付けさせることだけで終わらず、様々な学習活動に取り入れたり、キャンペーンを行ったりする等、スキルを実際に用い、そのよさを実感させるところまでやりきっている。また、学校生活の様々な場面で取り上げることで、WEB Q-U の結果の大幅な改善につながっている。

主体的に学び、英語で自己表現する児童の育成

～ 学習到達目標を具現するための ICT 活用に関する考察 ～

可児市立今渡北小学校 教諭 高木 恵子

本研究の目的は、ICT 機器を活用することにより、主体的に学び、英語で自己表現する児童を育成することである。本研究では、学習到達目標の具現に向け、ICT 機器の活用を含む様々な学習手段の中から自己選択し、自力でつまずきの解決を図りながら学ぶ過程の創造に注目する。現状における ICT 機器の活用の課題から、児童が得た知識・技能を働かせる言語活動を行うにあたり、ICT 機器の活用が有効となると考えた。その手立てとして、研究内容Ⅰでは、本校の実態に合った学習到達目標を設定する際、ICT 機器の活用場面を具体化して位置付け、児童が学習到達目標具現への見通しをもつことをねらった。研究内容Ⅱでは、児童が目的をもって ICT 機器(学習支援ツール「音読の練習 Reading Progress」)を活用し、英語で自己表現する言語活動の充実を図った。上記 2 点の実践に対し、児童アンケート調査及び話す能力を測定する「音読の練習(Reading Progress)」を実施し、それらの変容から本研究で提案する ICT 機器を活用した言語活動の有用性を考察した。

【講評】

小学生の段階で児童自ら発話の正確さや流暢さを試し求める経験は、相手に伝えたいという基本的なコミュニケーション能力の土台となっている。そこに ICT 機器の活用の位置づけを試みた姿は、新しい時代を生きる児童の主体的な学びを支える教師の姿として、非常に頼もしく感じる。今後も様々な学習支援ツールの可能性を探りながら、児童が英語で伝えあう楽しさを感じる授業づくりに期待する。

主体的に深く学び、実践につなげる食に関する指導をめざして

～ PDCAサイクルに基づいた効果的な指導資料の追究を通して ～

可児市立中部中学校 栄養教諭 中島 祐佳
栄養教諭 平川 瑞稀

本研究は、児童生徒が食を主体的に深く学び、実践につなげることを目的として、栄養教諭が専門性を生かして作成した指導資料の効果を、PDCAに基づいて検証したものである。

食に関する深い学びとは、学んだ知識・技能を、具体的な食事や実生活と結び付け、よりよい食生活を実現しようとする事と考える。深い学びのためには、教科横断的に学んだ知識を結び付けるための支援が、実践につなげるためには、実践を始めるきっかけを与えることが必要と考えた。また教職員と連携し、指導の機会を増やすことも重要と考えた。そこで①深い学びを支援する指導資料、②家庭での実践意欲を高めるための指導資料、③教職員と連携した指導のための指導資料を作成、実践し、PDCAサイクルに基づいて効果を検証した。その結果、栄養教諭自身が活用することで、知識を具体的な食事につなげて考えることができたり、家庭で食事作りに挑戦する実践意欲を高めたりすることができた。教職員が活用することで、食に関する指導を行う機会を増やすことができた。

【講評】

栄養教諭の立場から、児童生徒の実態をよく把握し、ねらいに迫るための資料が作成されている。栄養バランス以外に、食品ロス、地産地消に目を向けることができるようなテーマ設定、視覚的にイメージしやすい料理カードは、生徒の意欲や満足感につながる効果が表れていると感じる。現代のライフスタイルの変化、コロナ禍以降の残量や朝食欠食率の増加に着目し、すべき指導、すぐに実生活に結び付く指導を工夫した実践となっている。

令和4年度可児市教育実践論文応募のまとめ

校 種	職務別		年 代 別						性 別			領 域 別 (論文数)																合 計						
	教 諭	合 計	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	合 計	男 性	女 性	合 計	教 科										小 計 ①	道 徳	特 別 活 動	総 合 学 習	外 国 語 活 動	学 級 経 営		生 徒 指 導	特 別 支 援	健 康 安 全	管 理 経 営	そ の 他	小 計 ②
												国 語	社 会	算 数	理 科	生 活	音 楽	図 画 美 術	技 術 家 具	保 体	英 語													
小	15	15	9	4	2			15	7	8	15	1	2	2	1	1					3	10	1				1		2			1	5	15
中	13	13	5	6	1	1		13	6	7	13		2	2	2			1		1	1	9			1			1	1		1	4	13	
計	28	28	14	10	3	1	0	28	13	15	28	1	4	4	3	1	0	1	0	1	4	19	1	0	1	0	1	0	3	1	0	2	9	28

＜応募状況＞

＜優秀賞＞ 学番順

No.	学校名	氏 名	領 域	研 究 テ ー マ
1	今渡南	武市 諒太郎	特別支援	小・中学校特別支援学校で培った多様な視点による「個別最適な学び」の実現 ～特別支援教育と通常教育の両方向からアプローチする国語科での学びを軸に～
2	春里	竹屋 安里紗	学級経営	仲間との関わりの中で、よりよい人間関係を築いていく児童の育成
3	広見	古山 宏将	理科	科学的な見方・考え方を働かせる授業実践とQI及び家庭環境との関係の分析 ～第4学年「ものの温度と体積」の学習を通して～
4	今渡北	高木 恵子	英語科	主体的に学び、英語で自己表現できる児童の育成 ～学習到達目標を具現するためのICT活用の考察～
5	中部	中島 祐佳 平川 瑞稀	健康教育	主体的な学びを深め、実践につなげる食に関する指導をめざして ～PDCAサイクルに基づいた効果的な指導資料の追究を通して～

＜優良賞＞ 学番順

No.	学校名	氏 名	領 域	研 究 テ ー マ
1	帷子	小関 美菜子	算数科	自ら求め、仲間とともに学びを確かにする子の育成 ～仲間と考えを広げ深め合い、確かな力をつける算数科学習のあり方～
2	東明	後藤 茉奈美	英語科	語彙知識を活用し、伝えたいことを英語で表現する力を育む学習指導 ～児童が、英語が分かる喜びと英語で伝え合う楽しさを感じることができる音声中心のインプットとタスク型活動の工夫～
3	今渡北	遠藤 夢奈	社会科	情報を適切に調べ、まとめる技能をつける児童の育成
4	今渡北	二瓶 なつほ	道徳	道徳的な実践意欲と態度を養う授業づくり
5	中部	小川 裕美	総合学習	多文化共生を肯定的に理解し、共生していこうとする生徒の育成 ～中学1年生 総合的な学習の時間における地域学習を通して～
6	西可児	三品 達也	英語科	主体的に自分の考えを伝える生徒の育成 ～目的・場面・状況を工夫した言語活動を通して～
7	西可児	藤木 玄太	社会科	思考と認識を深め、主体的に社会の形成に参画できる生徒の育成 ～主体的・対話的で深い学びを生み出す工夫を通して～

＜奨励賞＞ 学番順

No.	学校名	氏 名	領 域	研 究 テ ー マ
1	今渡南	橋本 浩希	特別支援	児童理解を基にしたことばの指導を通して、児童・保護者の意識と実践力を高める ～ニーズに応える教材開発を通して～
2	今渡南	杉本 礎実彦	国語科	文学的文章を主体的に読み取ることができる子の育成を目指して ～重要語句に着目した読み取りやシミュレーション活動を通して～
3	土田	長島 ヒデキ	社会科	外国籍児童が多数在籍する学級における歴史学習の在り方 ～単元構成の工夫とグループ学習の推進による効果～
4	広見	市川 苗己	その他	共に学び合い高め合う児童の育成をめざして ～協働学習・共同学習を見つめ、考え直す～
5	広見	水野 初音	生活科	仲間との関わりの中で、自己肯定感を高め、様々な活動に意欲的に取り組みながら、自信をもって生活できる児童の育成をめざして ～小学校第1学年『じぶんでできるよ』におけるICT機器を活用したグループ学習を通して～
6	桜ヶ丘	曾我 治寿	英語科	コミュニケーションを図る基礎となる「資質・能力」を育む授業の在り方 ～粘り強く伝えたり、理解したりする態度の育成～
7	今渡北	尾崎 紘夢	算数科	児童の主体的に説明しようとする姿を育む算数科授業実践 ～グループ活動の利活用から～
8	蘇南	福住 恵子	その他	先生方の健康・笑顔が子どもたちに還元されますように ～退職間近の私が伝えていきたいこと～
9	蘇南	平道 舞	美術科	「こんな表現がしたい」と願いがもてるために ～授業終末の振り返りを個別支援に生かす指導を通して～
10	蘇南	井上 陸生	数学科	数学的に考える力の育成を目指した実践研究 ～単元「量の変化と比例、反比例」での指導の工夫～
11	中部	久野 正弘	社会科	自らの「学び」の見通しをもち、実感ができる社会科学習 ～社会的事象に対する主体的な学びを生み出し、思考と認識を深める、課題設定と振り返り活動の充実と工夫～
12	中部	溝上 柚葉	数学科	関数のよさを実感できる授業の工夫・改善 ～日常生活と数学の世界をつなぐ授業実践～
13	西可児	伊藤 由希	保健体育科	自ら考え、自ら判断し、自ら表現する生徒の育成 ～教科等間のつながりを意識して～
14	西可児	市岡 彩	特別支援	自己の成長に気付き、自立と社会参加を目指す生徒の育成 ～生活単元学習での「思考ツールを用いた学び合い」と「集団活動での役割」を通して～
15	西可児	高木 康司	理科	生活経験・既習内容と繋げる理科学習 ～比較したり、関係付けたりしながら考えることができる生徒の育成～
16	東可児	浦谷 神佑	理科	楽しさや有用性を実感させる理科指導 ～見通しをもたせる指導計画とつなぐ振り返りを通して～